日系ブラジル人青年の来日後のハーディネス

岡　村　佳　代

お茶の水女子大学　人文科学研究
第９巻（2013）別刷

人文科学研究　No.9, pp.83-95　　March 2013

日系ブラジル人青年の来日後のハーディネス

岡　村　佳　代

１．問題の所在と研究

1990年の入管法の改正の改正以降，日本国内においてニューカマーと呼ばれる外国人の定住化が進んでいる。それに伴い，地域社会や学校，職場における外国人の存在も珍しいものではなくなり，日本社会も多文化化が進んでいると言える。入管法の改正から20年以上が経過し，一時期ほどの外国人登録者数の増加傾向は見られなくなったものの，外国籍をもつ外国人のみならず，帰化した者や国際結婚をして国籍を取得した者，両親のどちらかが外国にルーツを持つ者なども含めると，今後ますます日本国内において文化的に多様な背景を持つ人々が増加していくことが考えられる。

これまでニューカマーに関する研究は様々な視点でなされてきているが，90年代にニューカマーが急増した当初から，ニューカマーの子どもに関して様々な問題が生じたことが報告されている。志水・清水（2001）は，ニューカマーの子どもの問題群を大きく「適応の問題」，「言語の問題」，「学力の問題」，「アイデンティティの問題」の４つにまとめ説明している。その中でも特に「適応の問題」については，佐藤（2001）がBerry（1980）のモデル[(1)]を使って適応様式を説明しており，ニューカマーの子どもは「境界化」の状態にあることが多いという。また，光長・田渕（2002）においてもこのモデルの「同化」や「境界化」の状態にあるニューカマーの子どもが多いと指摘している。その他にも，日本の義務教育制度の在り方に起因する不就学問題（宮島・太田，2005）や，日本生まれや幼少期来日であることにより一層複雑になる言語と学力の問題（清水，2006），義務教育後の高校進学への壁と高校進学後の支援不足の問題（林嵜・津村，2005；乾，2008），来日後に生じる様々な問題に端を発する心理的な問題（竹山・葛西，2008）などが挙げられる。これらの質的な研究を踏まえ，岡村（2011）は，ニューカマーの子どもが増加した現状においては，彼らの困難について全体的な傾向を捉える必要性があるとし，量的な質問紙調査を行った。対象者は，ニューカマーの中学生・高校生192名で，日本の学校生活における困難と対処行動について問うものである。その結果，彼らの学校生活の困難には，「情報・サポート不足」「日本人ピアとの不和」「学校・教師不信」「日本人の異文化理解不足」「同化要請」「部活文化への困惑」があることが示された。さらに，彼らの困難への対処行動を調べたところ，「問題解決」「感情的自己主張」「肯定的回避」「否定的回避」「サポート希求」と自らが工夫し対処していることが示された。このことから，ニューカマー生徒を保護，支援の対象としてのみ捉えるのではなく，自助資源（ニューカマー生徒が自らもつ能力）に着目する必要があると思われる。ニューカマー自身がサポートを受け取る能力や周囲からサポートを引きだす能力，さらには考え方の転換等により自らの困難をポジティブに捉える能力など，個々人の「強さ」というものも今後の日本での人生を充実させていくうえでは重要なものであろう。

この「強さ」の概念として挙げられるものの一つにハーディネスがある。ハーディネスとは，精神的た

くましさのことであり，困難な状況で問題が生じることを跳ね返す力である（Kobasa, 1979）。Kobasa（1979）によれば，このハーディネスは，コミットメント，コントロール，チャレンジの３つの要素から成るとされている。コミットメントとは，自分が誰であり，何をしているかについての信念であり，自分自身や仕事や家族，対人関係，社会組織等の人生の様々な状況に対して自分を十分に関わらせている傾向（Orr & Westman, 1990）である。コントロールとは，個人が出来事の推移に対してある一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ，行動する傾向であり，責任感を含むものであるが，他者への操作を含むものではない（Orr & Westman, 1990）。チャレンジとは，毎日の生活において安定性よりもむしろ変化が人生の標準であるという信念に基づく（Orr & Westman, 1990）。また，予期しなかった変化や脅威となる事態を有害とみなすのではなく，むしろ自分の成長のためにプラスになると期待をもつ傾向（西坂，2002）である。

このハーディネスに関しては，Kobasa（1979）により作成された尺度をはじめとし，その後もコミットメント，コントロール，チャレンジの３つの構成概念を測る尺度（Kuo & Tsai, 1986; Westman, 1990など）がある。また，まったく別の尺度からハーディネスの測定を試みた尺度（Howard, Cunningham & Rechnitzer, 1986）も作成されるなど，尺度の開発と尺度によるハーディネスの測定が試みられている。日本においては，大学生を対象とした研究（多田・石原・濱野，2001；小坂，2007など），幼稚園教師などの職業を持つ人を対象とした研究（西坂・岩立，2004など）や中学生を対象とした研究（稲葉・森・五十嵐，2010）など，尺度の開発や尺度によるハーディネスの測定に加え，ストレスなどの変数との関連をみる研究がなされてきた。しかしながら，日本におけるニューカマーを対象とした研究は管見の限り見当たらず，多文化的な背景を持つ人々の増加が進む昨今においては，異文化環境における自分の持つ強さであるハーディネスに関する検討が必要であると思われる。ニューカマーを含めた外国につながる子どもが，日本で成長し主体的に生きていくことを考えると，彼らの日本の生活における困難や精神的な不安定さを明らかにし，それらをサポートしていくという視点だけでは不十分である。彼らが異文化環境で生きているからこそ経験する事柄から学び，より強く成長しているという視点も必要なのではないかと思われる。

以上のことから，本研究では特に困難を跳ね返す力であるとされるハーディネスに注目し，ニューカマーの持つ強さが具体的にどのようなものであるかを明らかにすること目的とする。また，対象者各々のハーディネスの獲得状況について，事例を取り上げながら検討していくこととする。

2．研究方法

2.1．対象者および調査方法

2011年３月，ニューカマーの成人男女５名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビュー時間は１人につき60分程度で，質問の内容は，来日後から現在までの日本の生活についてであり，日常生活や学校生活，進学や就職等における困難やそれらへの対処，また，それについてどのように考えていたのか詳細に語ってもらった。対象者は，全員がルーツをブラジルと日本に持つ日系ブラジル人である。また，いずれも幼少期の来日，滞日年数も10年以上であった。対象者の属性を表１に示す。

表１　対象者の属性

対象者	性別	インタビュー時の年齢	来日年齢	出生国
A	F	20歳	6歳	ブラジル
B	M	25歳	7歳	ブラジル
C	M	24歳	4歳	ブラジル
D	F	24歳	5歳	ブラジル
E	M	20歳	6歳	ブラジル

2.2.　分析方法

５名のインタビューの内容を文字化したデータを分析対象とした。ニューカマーの「強さ」に関する箇所を抽出するために，ここでは，先述の「ハーディネス」の概念を用い，コミットメント，コントロール，チャレンジの３要素を「強さ」と定義し，それらに相当する語りを抽出した。この「強さ」に関する箇所の抽出に際しては，恣意的な解釈による「強さ」の抽出になることを防ぐために，筆者以外に博士後期課程の同じ専門分野の大学院生２名にも「ハーディネス」の概念に基づく「強さ」に関する箇所を抽出してもらい，その一致率をみたところ，83％であった。妥当性と許容範囲の一致率が認められたため，ここで抽出されたものをKJ法（川喜田，1967）を用いて分類を行った。なお，本研究の分析においては，従来のハーディネスの３要素に縛られず，元々のKJ法の方法に従い，ボトムアップ式に分析を行った。それにより，より具体的で現実を反映したカテゴリー化を目指した。

3．結果と考察

3.1.　来日後のハーディネス

日系ブラジル人ニューカマーの来日後の困難，それに対する対処方法やどう考えていたかなどの語りをKJ法で分析した結果，『ルーツ受容』，『過去受容』，『現状肯定』，『未来開拓志向』の４つの大カテゴリーが得られた（図１）。ここでは，図１に沿って，それぞれのカテゴリーを説明していく。

3.1.1.　ルーツ受容

まず，１つ目の大カテゴリー『ルーツ受容』には，中カテゴリーが３つ含まれる。まず，「ルーツに関連した自己理解」が12例あり，これは，自分自身がどのようなルーツを持って生まれてきたのか，自分の出自を明確に理解しているというものである。

この「ルーツに関連した自己理解」には，５つの小カテゴリーが含まれる。まず，自分自身のルーツを理解した［ルーツの理解］が３例，ルーツを理解した上でその枠組みに自分自身を当てはめるのではなく，その枠組みを超越して自分自身を認識している［カテゴリーに左右されない自己認識］が３例であった。また，幼少期にブラジルから来日してはいるものの，やはりルーツが日本にあるということを意識している［日本に強いつながりを持つ自己への認識］が２例，自分が日本，ブラジルにルーツを持つことを理解し，そのような立場であるからこそできること，しなければならないことがあるという認識を持っている［自己役割の認識］が２例，見た目や名前などの日本人との差異について理解し，それが自分なのだと受

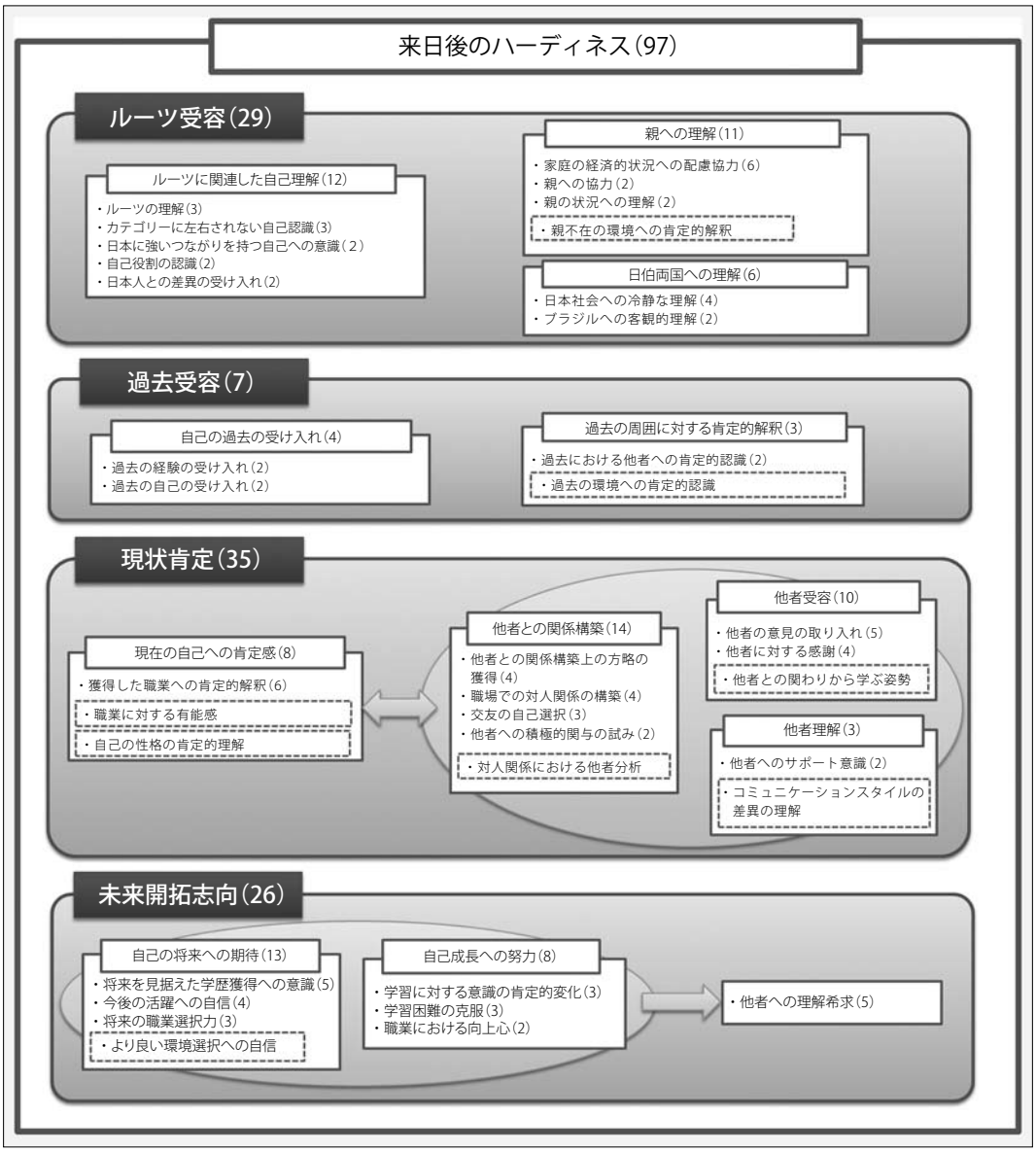

図1　日系ブラジル人青年の来日後のハーディネス

け入れている［日本人との差異の受け入れ］が2例である。ルーツを正しく理解し，より大きな枠組みの中でルーツを受容することが自分自身の受容にもつながるということが示されており，これは，異文化環境に身を置くニューカマーにとって特徴的，かつ重要なハーディネスの要素であると考えられる。

次の中カテゴリーとして「親への理解」が11例あり，これは，親の経済状況や仕事の状況などを理解し肯定的に捉えているというものである。小カテゴリーとして家庭の経済状況を理解し，自分自身も金銭面での迷惑をかけまいとする［家庭の経済状況への配慮］が2例，自分自身もアルバイトをする，兄弟の世話をするなど親に協力している［親への協力］が2例，親が朝早くから夜遅くまで工場労働に従事している親の状況を理解している［親の状況への理解］が2例であった。単独カードとして，親が不在がちな状況について悲観的にならず，自由さなどの良い面を捉えようと試みている［親不在の環境への肯定的解釈］

が１例あった。1990年の入管法の改正直後に来日した日系ブラジル人の多くは出稼ぎを目的として来日していた。今回のインタビュー対象者の親たちも例外ではなく，来日当初は派遣による工場労働に従事していた。正社員ではないことによる経済的な不安定さや長時間労働の問題は，その子どもたちにも負担を与えたに違いない。しかし，そのような状況を悲観したり，親を責めたりするのではなく，日系ブラジル人として出稼ぎに来た親の状況に理解を示している。

３つ目の中カテゴリーは「日伯両国への理解」６例で，日本，ブラジルについて客観的，かつ冷静に分析，理解しているというものである。小カテゴリーには，なにか不都合が起きた際に，その原因を何でも日本社会に帰属することなく冷静な判断をしている［日本社会への冷静な理解］が４例，日本に居住したことで，外側からブラジルを見たり，俯瞰的にブラジル人を見たりすることができるようになったという［ブラジルへの客観的理解］が２例であった。このように，自分のルーツの多様性と文化間の移動が，日本，ブラジル両国への深く客観的な理解を可能にしたものと思われる。

以上のことから，自分のルーツを関連させた上で自分自身を理解し自己受容をすること，そして，親の背景や現在の状況を理解することや，日本とブラジルについて客観的に理解することから日本とブラジルという自分自身の『ルーツ受容』につながっているものと考えられる。

3.1.2. 過去受容

２つ目の大カテゴリー『過去受容』には，２つの中カテゴリーが含まれる。１つ目の中カテゴリーとして「自己の過去の受け入れ」が４例あり，これは自分自身の過去を振り返り，過去の自分自身や出来事を肯定的に捉えているものである。小カテゴリーとして，ブラジルと日本の文化間の移動など，過去に経験したことを，その経験ができてよかったと捉えている［過去の経験の受け入れ］が２例，過去に自分が下した判断や行った行動をそれでよかったと受容している［過去の自己の受け入れ］が２例であった。自分自身の過去に関して経験や自分の判断を肯定的に捉えられる力があることが示されている。

もう１つの中カテゴリーとして「過去の周囲に対する肯定的解釈」が３例あり，これは過去における周囲の人々や環境に対し肯定的に捉えているものである。小カテゴリーを見ていくと，過去においてクラスメイトや家族がしたことについてそれでよかったのだと肯定的に捉えている「過去における他者への肯定的解釈」が２例あり，単独カードとして来日直後の周囲の環境を振り返り，厳しい面もあったがその環境がかえってよかったと思うようになった［過去の環境への肯定低解釈］が１例あった。過去における他者の行動や自分のおかれた環境を否定的に捉えるのではなく，それがあったからこそ今の自分があると肯定的に捉えていることが示されている。

以上のことから，自分自身の過去の言動を肯定的に捉え，また，日本の生活に不慣れな時代を振り返り，困難なこともあったがそれがかえってよかったのではないかと肯定的に捉え直すことで『過去受容』していると思われる。

3.1.3. 現状肯定

３つ目の大カテゴリー『現状肯定』には，中カテゴリーが４つ含まれる。まず，１つ目の中カテゴリーとして「現在の自己への肯定感」が８例あり，今就いている職業や自分の性格等，現在の自分自身を形成しているものに肯定的な感情をもっているというものである。小カテゴリーは，現在の職業に関して，それが希望して得たものと違っていたとしても良い面を見つけて肯定的に解釈している［獲得した職業への肯定的解釈］が６例であった。単独カードとして，現在の職業において自分自身の有能さを実感している

［職業に対する有能感］が１例，自分自身の性格を理解し良い部分に注目している［自己の性格の肯定的理解］が１例であった。職業，職業における自分の能力，性格など，現在の自分自身について過小評価するのではなく肯定的に解釈していることが示されている。

次の中カテゴリーとして「他者との関係構築」が14例あり，これは，他者との関係を自分なりに工夫して構築しているというものである。小カテゴリーとして，どのように他者との関係構築をしていけばいいのかということを自分なりに考え，自分なりの方法を見つけたという［他者との関係構築上の方略の獲得］が４例，職場において人種，年齢，地位などが違う，多様な人々との関係を上手く構築できるという［職場での人間関係の構築］が４例，人付き合いに関する基準があり相手の人格や状況などの判断により自分なりに付き合う人を選択しているという［交友の自己選択］が３例，他者に積極的にかかわっていこうという姿勢を表す［他者への積極的関与の試み］が２例であった。単独カードとして，他者と付き合う上で相手をよく見てどんな人なのかを判断しようとする［対人関係における他者分析］が１例であった。来日後，日本語の使用に不自由がある中で友人との関係を構築してきた彼らにとって，どのように人と付き合えばいいのか，どのようにしたら仲良くなれるか，ということは常々考え，試行錯誤していたことであると考えられる。そのような中で人間関係を構築する術を必然的に獲得してきたのだろう。

３つ目の中カテゴリーとして「他者受容」が10例あり，これは，他者の意見や存在そのものを受け入れているというものである。小カテゴリーとして，他者からのアドバイスなどを自分の中に取り込んでいくという［他者の意見の取り入れ］が５例，友人や職場の同僚などに対し，その人がいてくれてよかったとその存在に感謝している［他者に対する感謝］が４例あり，単独カードとして，仕事を通して出逢う人々から学びを得，それを活かそうという［他者との関わりから学ぶ姿勢］が１例であった。この「他者受容」は，自分と関わりのある他者が自分の人生にとって重要な存在だと認識していることからくるものであると考えられる。

４つ目の中カテゴリーとして「他者理解」が３例あり，これは，他者の状況や気持ちを理解しようというものである。小カテゴリーとして，他者，特に自分と同じような背景を持つニューカマーの心情や状況を理解し，自分にできることがあればサポートしたいという「他者へのサポート意識」が２例であった。単独カードとして，地域や国によってコミュニケーションスタイルが異なることを理解し，それに合わせようとしている「コミュニケーションスタイルの差異の理解」があった。自分が来日後に様々な困難を経験したことにより，他者への理解，共感ができるようになったものであると思われる。

以上のことから，自分自身の性格や仕事など，今あるもの，置かれた状況を肯定的に判断することで現在の自分自身を肯定している。それに加えて，自分を取り巻く「他者との関係構築」，「他者受容」，「他者理解」により他者との関係を調整していくことで，『現状肯定』していると考えられる。

3.1.4. 未来開拓志向

４つ目の大カテゴリー『未来開拓志向』には，中カテゴリーが３つ含まれる。まず，１つ目の中カテゴリーとして「自己の将来への期待」が13例あり，これは，自分自身の将来の目標をたて，それに向かって努力したり，それが実現できると考えたりしているというものである。具体的には，希望の職業に就くために学歴をつける必要があるという意識を持った［将来を見据えた学歴獲得への意識］が５例，自分自身のこれまでの経験を仕事の上で活かすことができるという［今後の活躍への自信］が４例，将来の職業を自分自身で選択していけるという「将来の職業選択力」が３例であった。単独カードとして，自分にとってよりよい環境を作り出すことができるだろうという［よりよい環境選択への自信］が１例であった。い

ずれも，今以上に将来の自分が成長していること，自分の将来はより良いものになっていることなど，自分の将来を明るく捉え，未来に対する肯定的な意識を持っているものである。

２つ目の中カテゴリーとして「自己成長への努力」が８例あり，これは，学業や職業における困難の克服などの向上心が表れているものである。詳細を見ていくと，希望の職業を得るために勉強したいという目的意識をもつことや，学業は将来の自分に役立ったり，自分の助けになったりするものであり，面白いものであるというように学業に対する考え方が肯定的に変化した［学業に対する意識の肯定的変化］が３例，苦手なことを克服し，難しくても必要な知識や技術は獲得しようという意欲が芽生えた［学業困難の克服］が３例，得られた職業の中でより良い働き方をしたい，または自分自身を活かして社会貢献するためにキャリアアップをはかろうという［職業における向上心］が２例であった。いずれも，学業や職業において将来を見据えて努力することへ意識が向けられている。

３つ目の中カテゴリーとして，「他者への理解希求」が５例あり，これは自分の現在の状況を理解してもらうこと，就職等の将来のために，今後の生活のために，自分自身の要求を理解し受け入れてもらうために，訴え，交渉するというものである。従来の制度，規則，慣例をそのまま受け入れ，将来を諦めるのではなく，現行の制度さえも交渉次第で変えていくような希望や熱意を持ち，行動に移すという力強さを感じさせる。

以上のことから，将来を明るく捉え，それに必要な努力を行うことで，未来に向かう自分自身を受容していることが示されている。また，自分が置かれた環境に不都合や不自由なことがあったとしても，それをただ悲観するのではなく自分自身で変えていく意識を持ち，行動に移すことにより未来を切り開いていくことが『未来開拓志向』となっていると考えられる。

上述の通り，ニューカマーのハーディネスには『ルーツ受容』，『過去受容』，『現状肯定』，『未来開拓志向』の４つがあり，これらが彼らの強さを形成しているものと思われる。ルーツや過去は，変えることはできない。しかし，事実は変えられなくても，その事実をどう捉えるか，どう解釈するかにより，ルーツや過去の意味合いを変化させることは可能である。その肯定的な捉え方，肯定的な解釈ができることにより，ルーツや過去を受容していることが示されている。また，今現在の状況を肯定的にとらえることは，自分自身への肯定的な評価と周囲の人々との関係をよりよく構築していくことによるものである。この自分自身への肯定感と他者とのよりよい関係構築というのは相互補完的なものであるとも考えられる。つまり，周囲との良好な関係の中で自分自身の職業や性格を肯定的に判断したり，自分自身を肯定的に捉えることでより積極的に交友関係を広げたり深めたりすることが可能になるのである。さらに，未来を切り開いていく意識は，学歴や社会貢献への意識であり，それは，社会と自分との関係性への意識でもあると考えられる。つまり，日本社会において「外国人の自分も目標を持って努力すれば目標を達成できる」，「外国人だからといって目指す道が完全に閉ざされているわけではない」という意識を持つことができなければこの『未来開拓志向』の獲得は難しいと考えられる。したがって，彼らの強固な信念とともに，周囲との関係の中でつくられる日本社会への信頼感が重要になってくると思われる。

３.２．　青年期ニューカマーのハーディネスの獲得状況―事例からの検討―

インタビュー対象者の５名のうち，ハーディネスに関する語りをしていたのは４名であったが，１名はハーディネスに関する語りをほとんどしていなかった。そこで，次に，対象者Ａ～Ｅの５名について，KJ法で抽出されたカテゴリーに関する語りの有無をハーディネスの獲得状況の基準とし，どのような要因によりハーディネスが獲得されていたか否かを検討していく。

3.2.1. ハーディネスを獲得していると考えられるケース―対象者Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ―

ここでは，インタビュー時点でハーディネスを獲得していると考えられるケースを詳しく見ていく。

まず，Ｃは,『ルーツ受容』『過去受容』『現状肯定』『未来開拓志向』の４つの大カテゴリーにおいて，バランス良く語りが見られた（図２）。このように，インタビュー時点でＣがバランスよくハーディネスを獲得していたのは，早い段階から『ルーツ受容』をしていたことがプラスに作用したためではないかと考えられる。つまり，『ルーツ受容』を起点として『過去受容』『現状肯定』『未来開拓志向』という他のハーディネスの要素が獲得されたのではないかということである。Ｃは，自分のルーツに関しては，幼いころから両親や祖父母とよく話をしており，先代，先々代にさかのぼってよく理解し，プライドも持っているようであった。そのため，小学校時代に，名前がカタカナでみんなと違うことについて友人に指摘された時にも「しゃあないやん。これが自分の名前なんやし。」と自信を持って返答していたという。『ルーツ受容』をしていたからこそ，日本人との差異に苦しむこともなく，困難な出来事についても，自分には当然起こり得ることであり，かえってそれが貴重な経験であると捉えていたという。現在の職業についても，語学や自分のこれまでの経験など，ルーツに関連した活かせる部分をきちんと理解し，活用している。また，未来についてもルーツに関連して自分ができること，自分にしかできないことをしようという意識がある。さらに，未来については『現状肯定』に含まれる［職業に対する有能感］がさらなるキャリアアップへの意識である『未来開拓志向』を高めていると考えられる。

図２　Ｃのハーディネス獲得状況

次に，Ｂは『ルーツ受容』『過去受容』『現状肯定』の３つの大カテゴリーに語りが見られた（図３）。Ｂは，アジア系の外見ではないため，早くからその差異を意識し，自分は日系ブラジル人でも「どう頑張っても日本人のフリはできないんですよね。」と早くからルーツを受け入れていた。過去に関しては，いじめられた時期や社会や学校に対して冷めていた時期もあったため，『ルーツ受容』がそのまま『過去受容』につながっているとは言い切れない。Ｂは，「今となっては，あの判断は良かったと思う。」や「当時の冷めた性格がかえってよかったのかもしれない。」というように，現在から過去の自分を振り返って，当時の経験や自分自身の判断は，結果としてよかったのではないかという発言が目立つ。つまり，『現状肯定』が起点となり，『過去受容』ができているものと考えられる。現在については，自分のルーツを活かした職業についており，仕事に対する難しさや面白さを感じており，充実感が得られているようであった。「今までのチャンスも全部人が持って来てくれた。」と語っているように，多くの人々と出会い，関係を築き，その中からチャンスを得るなど対人関係の調整能力は高い。その他者との関係の中でさらに自分自身に対する肯定感が増しているようであった。未来については，まだ目標が明確に定まっていないということで『未来開拓志向』に関する語りは少なかったが，将来に対する悲観などはなく肯定的にとらえているようであった。このようにＢは，『ルーツ受容』が起点となり『現状肯定』が十分に獲得され，それにより『過去受容』へとつながっているタイプであると考えられる。

図３　Ｂのハーディネス獲得状況

さらに，ＡとＤは，大カテゴリー『ルーツ受容』,『現状肯定』,『未来開拓志向』に関する語りが得られ

た（図４）。

Ａは，幼いころより自分のルーツについては明確に理解しており，Ｄも日本とブラジル，日本人とブラジル人を客観的に捉える視点を持ち，両者を冷静に理解している。２人ともルーツを受容し，それに関連して語学やこれまでの経験を活かした仕事に就いており，自分自身の性格や特性を活かすことにも意欲的である。Ａに関しては，「(今の仕事よりもある組織の職員のほうが）外国人を助けられるんじゃないかなぁっていうのが。組織に入って，その組織の中で何か変えられるんじゃないかなって思って。」という語りがあることから，『現状肯定』の獲得が，さらに自分自身の役割の認識などの『ルーツ受容』を強化していることも考えられる。また，この発言からもわかるように『現状肯定』の獲得は，未来の目標にも繋がっている。２人とも目標を達成するための努力をしており，語学学習などの自分自身の能力の伸長にも積極的であると同時に，今後の仕事の幅を広げるために，役所や就職先に直接出向き就職の可能性を打診しする行動もおこしている。

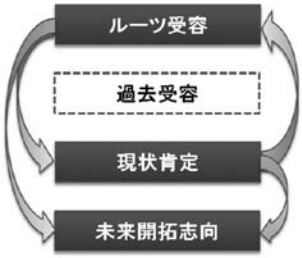

図４　Ａ・Ｄのハーディネス獲得状況

その一方で，この２人は『過去受容』，その中でも特に「自己の過去の受容」への発言が見られなかった。現在の生活や未来に向けての意識が強く，過去の自分自身を受容する段階に至っていないとも考えられるが，その一因として考えられるのは，ＡとＤが共に過去において親との関係が良好とはいえないことである。

Ａ：私の場合は，お母さんとお父さんはずっと仕事～，朝早く出かけて，夜遅くしか帰ってこなかったので。お母さんとかには学校で何があったとか，何をした，何を勉強した～とかって報告みたいな感じでは話してたけど（本音は話していなかった），…中略…（特に）中学校の時は，お父さんとお母さんと関係がぎくしゃくして，あんまり話してなかったんですよね。…中略…家出とかもしたかったんですけど，その（幼馴染の）お父さんとお母さんが絶対止めたほうがいいよって，絶対あとで後悔するよ～っていうので（やめました）。

また，Ｄも次のように語っている。

Ｄ：中学の頃，親が再婚して，子どもができて。弟が二人いるんですけど，それで忙しくて，こっち（Ｄ）を見てあげるっていう余裕はなかったんでしょうね。で，仕事，家事，育児っていう感じで（あまり話さなくなった）。…中略…よく行ってたカラオケ屋の店長さんが，そういう子たちをすごい可愛がってくれて，いろいろアドバスしたりとか，ご飯も食べさせてくれたりとか。みんな面倒は見てくれてたので，そこまであの～，違う道に走らずに済んだのかなって。

このように，ＡとＤは，親との関係が希薄で，地域社会における周囲の人々によって支えてもらっていた。このような過去の状況について，周囲への感謝はあるものの，当時のありのままの自分自身を肯定的には考えられず受容できていないと推測できる。しかし，インタビュー時点で，「(父は）工場とかそういうストレスで，視野が狭くなってくるので，苦労しますよね。」のような当時の父親の状況への共感，つまり，『ルーツ受容』の中カテゴリー「親への理解」に関する発言が出てきている。そのため，この『ルーツ受容』が起点となり，過去への受容へとつながる可能性が考えられる。

３.２.２.　ハーディネスを獲得していないと考えられるケース―対象者Ｅ―

Ｅは，『ルーツ受容』『過去受容』『現状肯定』『未来開拓志向』のすべてにおける語りが少なかった（図５）。Ｅは，６歳の時に来日し，その後，中学２年の時に１年間，ブラジルに行くことになり，また日本に戻ってきている。ブラジルに行くことになったときのことについて，「すごくこっち（日本）で慣れて

たから，もうやだよって。ヤダヤダ行きたくないって感じでした。」と語っているように，ルーツであるブラジルに対しては，怖いところというイメージがあり，肯定感はない。ブラジルでの生活に関しても「僕たちが日本から来て，お金があったから友だちになったのかなぁって。」と語っているように，ブラジルでの交友関係にも不信感があった。一方で日本の生活における交友関係に関しても「だんだん大人になってくるから，悪い外国人とかいっぱいいる（っていうのがわかってくる）じゃないですか。その影響で，あ～あいつは外国人だ，そういう差別みたいな，あんまり関わりたくないって。」と語っており，日本にいてもブラジルにいても居心地の悪さを感じていた。そのようなことから自分のルーツに肯定感を持てず，『ルーツ受容』していないことが分かる。過去については，親が仕事で忙しく家にいなかったことや，学校でも適切な対応がなされなかったこともあり，周囲の状況についても自分自身についてもあまり肯定的な発言は見られない。特に中学卒業時の進路選択については，現在においても後悔の念があると語っている。それは高校に進学しなかったことが，現在の職業にも好ましくない影響を及ぼしていると考えているためである。現在は派遣で工場の仕事をしているが，自分を活かせる職業を選択するという意識からではなく，現在の職業に対する肯定感などは見られない。しかし，職場の仲間との関係は良好で，「やっぱり友達作るのが好きなんですよね。で，日本人の友達が紹介してくれるとだんだん広がる。就職してからはだんだん友達が作れた。」と語っているように，交友の広がりについては充実感がある。将来については，現時点では明確な目標がなく，自分自身への期待についてもあまり語られなかった。このように，Ｅは，現時点ではハーディネスとして抽出できる発言が少ない。ルーツや過去を受容できない状態が，現在の自分を肯定できず，未来への希望を見出せない状況と密接にかかわっていると考えられる。

図５　Ｅのハーディネス獲得状況

４．総合的考察

以上のように，５名の対象者は，ハーディネス獲得の有無により２つに大別される。Ａ～Ｄの４名とＤである。その中でハーディネスを獲得している４名の事例からは，ハーディネスの獲得状況はぞれぞれであり，どの要素から順に獲得するという段階的なものではないことが示されている。つまり，『過去受容』ができていなければ『現状肯定』や『未来開拓志向』が得られないものではなく，ＡやＤのように『過去受容』ができていなくても，現在や未来を肯定的に捉えることができることが示されている。また，『現状肯定』することから，ルーツや過去をより深く受容していくという，ハーディネスの獲得の様相も見られた。さらに，Ａ～Ｄの４名とＤの事例を検討することで『ルーツ受容』の有無によりハーディネスの獲得に差異がある可能性が示された。

以上の結果から，ハーディネスの獲得における『ルーツ受容』の重要性について，また，ハーディネス獲得の起点の１つとなる可能性が示された『現状肯定』に関して考察を加えていく。

４.１．　ハーディネス獲得における『ルーツ受容』の重要性

Ａ～Ｅの５名の対象者のハーディネスの獲得状況を見ていくうえで，ハーディネスが獲得されていると感じられるＡ～Ｄに共通してあり，ハーディネスが獲得されていないと感じられるＥにはなかったものの

１つとして，『ルーツ受容』がある。Ａ～Ｄのケースを見ると，『ルーツ受容』は『現状肯定』につながっていることが示されている。つまり，現在の職業に対して肯定的に捉えたり有能感を感じたりするうえで，また，自分の性格や特徴を肯定的に捉えるうえで，『ルーツ受容』できているか否かが重要なポイントとなると考えられる。

また，Ｅの事例からは『ルーツ受容』していないことが，問題の所在で述べた「境界化」へとつながる可能性を示唆している。Ｅは，幼少期から学齢期にかけて，ブラジルに居ても怖いイメージや不信感があり落ち着かず，日本に居ても差別感を感じていた。日本の小学校や中学校においても友人や教師との関係構築がうまくいかず居場所は得られなかった。このように，ブラジル人としてのアイデンティティを持たず，日本人との良好な人間関係も構築できないという「境界化」の状況は『ルーツ受容』できないことと影響し合い，悪循環となってしまったと考えられる。

これらのことから『ルーツ受容』がいかに重要であるかが示されているが，それでは，どのように『ルーツ受容』していくことができるのだろうか。まず，『ルーツ受容』をするうえで重要となるのは，親や祖父母との対話であると考えられる。Ａ，Ｂ，Ｃは，幼いころから親，または祖父母から自分自身のルーツについてよく話を聞いていたという。ルーツについて知識を得ることのみならず，祖父母，親，自分というルーツの継承意識が芽生え，自己役割への意識や自己の存在の肯定感にもつながっているものと考えられる。

また，周囲との関わりの中でルーツを理解していくことも考えられる。Ｄは，ルーツに関して親や祖父母との対話に関する語りは得られなかったが，周囲との関係や自分の経験の中からルーツに関しての理解を深めたものと考えられる。同じ日系ブラジル人と関わり，話を聞き，よい点も悪い点も客観的にルーツを理解している。

さらに，『ルーツ受容』しやすい環境であることも重要だろう。Ｅの語りの中で「外国人であることの差別」を感じたという発言が見られたが，Ｅが「日系ブラジル人」というルーツを受け入れられなかった原因の１つがここにあると思われる。加賀美（2012）は，ホスト社会の人々は，年齢，性別，民族，集団，言語，文化などの多様性を持つ人々（マイノリティ）を理解し，双方が心地よくともに生きていくことのできる地域社会，大学・学校コミュニティを保証することが必要であり，また，この多様性への寛容さと社会における偏見や差別の問題は密接に関連していると述べている。ホスト社会がマイノリティに対する寛容さを示すことにより，彼らが差別を感じることなく，自らのルーツに自信を持ち，『ルーツ受容』できるものと思われる。つまり，日本の社会がニューカマーのルーツを受け入れることこそが，ニューカマーが彼ら自身の『ルーツ受容』をするうえで，最も重要なことではないだろうか。

4.2．ハーディネス獲得の起点となる可能性がある『現状肯定』

Ａ～Ｄのケースから，『現状肯定』があることで，より深く『ルーツ受容』し，また，『過去受容』，『未来開拓志向』へとつながる可能性が示された。つまり，現在の充実感が自分自身のルーツや過去に対する考え方を肯定的なものにし，さらに未来を切り開いていこうという意欲へと結び付いていくと考えられる。また，『現状肯定』しているＡ～Ｄのケースをみると，『ルーツ受容』からのつながりで『現状肯定』しているだけでなく，今現在において，多くの他者とかかわり，そこから学びを得，チャンスを得，現在に対する充実感，肯定感が生まれていることが分かる。つまり，『現状肯定』するためには，『ルーツ受容』に関わる自己肯定感に加え，他者との関わりの中から自分の存在を肯定することの重要性が示されているといえる。また，他者との関係構築において，対象者ＡやＣは，来日後に言語でのコミュニケーションが

困難な状況を経験していることから，他者を観察し表情や雰囲気から他者の気持ちを理解しようとする習慣を持っていた。そのような非言語コミュニケーション能力を発揮するためにも，まずは，他者と関わっていくことが必要であり，学齢期には学校において，社会人になってからは会社内において，日本人の方からも積極的にかかわっていくことが重要であるといえる。

以上のことから，ニューカマーのハーディネスの獲得には，日本社会のあり方も大きく関わっていることが考えられる。『ルーツ受容』や『現状肯定』については，日本社会がマイノリティに対する偏見や差別を低減させていくことで，彼らのハーディネスの獲得を促進できる可能性がある。困難の解釈や対処においては個の「強さ」が重要であるが，その個の「強さ」の獲得を促進していくのには社会的関わりによるものが大きいことが考えられる。

5．今後の課題

本研究は５名のニューカマーを対象としたもので，一般化には限界がある。また，今回は一時点でのハーディネスを抽出したものであるが，ハーディネスは流動的なものであると考えられることから，変化していくことが予想される。今後は，今回の対象者に対し，縦断的に調査を行うことで，どのようなきっかけでハーディネスが強固なものになるのか，また逆に脆弱さをみせるのか，という点を明らかにしていきたい。さらに，より多くのニューカマーを対象に質問紙調査を行うことなどから，量的な調査においてもニューカマーのハーディネスの様相，関連要因等を明らかにしていきたいと考えている。そのようなことから，日本においてキャリア形成をしていくニューカマーに対し，長期的なサポートの視点，困難を対処する上での自助資源としてのハーディネスの形成をサポートしていけるような示唆が得られるものと考えている。

脚註

（1） 文化的アイデンティティを保持することと異文化の集団と関係を持つことに価値を置くかどうかにより類型化。文化的アイデンティティと特徴が保たれ異文化の集団と関係が保持されている状態を「統合-integration」，文化的アイデンティティと特徴は保持されておらず，異文化集団との関係が保持されている状態を「同化-assimilation」，文化的アイデンティティと特徴は保持されているが，異文化との関係が保持されていない状態を「離脱-separation」，文化的アイデンティティと特徴が保持されておらず，かつ異文化の集団との関係も保持されていない状態を「境界化-marginalization」とした。

参考文献

稲葉悠・森愛・五十嵐哲也（2010）「中学生のハーディネスによるストレス反応提言効果の検討」『愛知教育大学保健環境センター紀要』９，37-44

乾美紀（2008）「高校進学と入試」志水宏吉編著『高校を生きるニューカマー』明石書店，29-43

岡村佳代（2011）「ニューカマー生徒が経験する学校生活における困難とその対処行動－中学生と高校生の比較を中心に」『異文化間教育』34，95-105

加賀美常美代（2012）「グローバル社会における多様性と偏見」加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏編著『多文化社会の偏見・差別－形成のメカニズムと提言のための教育』明石書店，12-36

川喜田二郎（1967）『発想法創造性開発のために』中公新書

小坂守孝（2007）「大学生のインターネット，携帯電話利用に関するストレッサーとハーディネス，ストレス反応との関係」『北方圏生活福祉研究所年報』13，33-42

佐藤郡衛（2001）『国際理解教育　多文化共生社会の学校づくり』明石書店

志水宏吉・清水睦美編著（2001）『ニューカマーと教育』明石書店

清水睦美（2006）「ニューカマーの子どもの青年期―日本の学校と職場における困難さのいくつか―」『教育学研究』73(4)，135-147

竹山典子・葛西真記子（2008）「日本語ボランティア教員による外国人生徒への支援―日本語支援教室を中心とした心理・社会的支援システムの構築に向けて―」『コミュニティ心理学研究』11(2)，144-161

多田志麻子・石原金由・濱野惠一（2001）「大学生用ハーディネス尺度作成の試み」『児童臨床研究所年報』14，45-52

西坂小百合（2002）「幼稚園教諭野精神的健康に及ぼすストレス，ハーディネス，保育者効力感の影響」『教育心理学研究』50，205-212

西坂小百合・岩立京子（2004）「幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼすハーディネス，ソーシャルサポート，コーピング・スタイルの影響」『東京学芸大学紀要１部門』55，141-149

林嵜和彦・津村公博（2005）「浜松市における外国人と教育―中学卒業後と言語の問題から―」解放教育研究所編『解放教育』35(11)　明治図書出版，45-51

光長功人・田渕五十生（2002）「ブラジル人の子どもたちは，どのようにアイデンティティを変容させるのか？―帰国後の再適応を観察して」『奈良教育大学紀要人文・社会科学』51(1)，１-17

宮島喬・太田晴雄編著（2005）『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版会

Berry, J.W.(1980). Acculturation as Varieties of adaptation. In A.M. Padilla (Ed.), Acculturation, theory, models and some new findings. Boulder : Westview Press.

Howard, J.H., Cunningham, D.A., & Rechnitzer, P.A. (1986). Personality (Hardiness) as a moderator of job stress and coronary risk in Type A individuals: A longitudinal study. Journal of Behavioral Medicine, 9 (3), 229-244.

Kobasa, S.C. (1979). Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. Journal of Personality and Social Psychology, 37, 1-11.

Kuo, W.H., & Tsai, Y.M. (1986). Social networking, hardiness and Immigrants' mental health. Journal of Health and Social Behavior, 27, 133-149.

Orr, E., & Westman, M. (1990). Does hardiness moderate stress, and how?: A review. In M. Rosenbaum (Ed.), Learned resourcefulness: On coping skills, self control, and adaptive behavior. New York: Springer Publishing Company.

Westman, M. (1990). The relationship between stress and performance: The moderating effect of hadiness. Human Performance, 3, 141-155.